なヒョウタンを置いたこの碑は、表面には「施茶翁塚」と刻し、裏面には「地獄いや極楽とても望み無し　又六道の辻で施茶翁」と刻まれている。施茶翁とは上州館林藩主松平右近将監武厚の侍医羽左間宗玄をさす。この碑は、平間寺の再建が弘法大師一千年の御遠忌にあたる天保五年（一八五四年）に完成したのを祝って天保六年に建立されたものである。彼が著した『老婆心書』は文化一四年（一八一七年）の板行で、漢字仮名混じり文で書かれている。妊娠、出産にはじまり、急慢驚風、痘瘡にいたるまでその範囲は広く、その論説は古今の諸家の医説を折衷している。

かくしてこの医史跡めぐりツアーは無事終了した。帰宅で一緒になった参加者の一人が、このような催しはできるだけ多くやって欲しいですねといわれたことが、筆者の脳裏に深く残った。

さらに今まで神奈川県の医療の発展は明治以後からと思われていたが、今回のツアーによってすでに明治以前に多くの先人達が活躍していたことがわかってきた。今後はこの先人達のすばらしい業績の掘り起こしを是非しなければならないと考えている。

（日本医史学会神奈川地方会　杉田　暉道）

精神医学史国際シンポジウム（International Symposium History of Psychiatry on the Threshold to the 21st Century－Two Millennia of Psychiatry in West and East）印象記

平成一一年三月二〇日と二一日の二日間、名古屋市立大学医学部において、同大学精神医学講座、濱中淑彦教授（現名誉教授）の主催で精神医学史の国際シンポジウムが開かれた。精神医学史という研究分野については、最近日本でも、平成九年の精神医学史学会の設立と機関誌『精神医学史研究』の発刊などが実現し、ちょうど海外の隆盛と歩調を合わせる準備ができたところであった。このような状況を考えると、国内外の研究者たちを招いてこうしたシンポジウムが開かれるのは精神医学史研究の推進にとってまさに絶好のタイミングだったと言える。シンポジウムのタイトルが示すように、その内容は西洋と東洋の二〇〇〇年に渡る精神医学の営みを横断するもので、ヨーロッパ、アメリカ、韓国、中国そして日本から参加したシンポジストたちの顔ぶれとともに、非常にスケールの大きな学問的試みであった。

セッションの流れを見ていくと、一日目は「ヨーロッパの精神医学史」と「中国・韓国・日本の精神医学史」、二日目は「近代日本の精神医学の黎明」、「精神医学史における臨床的・理論的諸概念」、「認識論的、社会・文化的脈絡における精神医学史」という順序で、それぞれに四から八題の発表と

それに引き続く討論が行われた。ここでは、発表された演題一つ一つに詳しく言及することはできないが、たとえば初日最初のセッションでは、ヨーロッパの古代・中世から一九世紀に至る精神医学の諸相が、ガレノス(V. Barras)、ビンゲンのヒルデガルト(S. Tanemura)、パラケルスス(H. Schott)、プラッターからエスキロール(T. Hamanaka)、ピネル(J. Pigeaud)などの代表的形姿を中心に描出され、さらに、精神症状に関する概念規定の歴史が分析された(G. Berrios)。そこで見られたものは、西欧古典学の成果を踏まえた厳密な方法論、よく知られた思想家に関する新たな視点、ある精神医学者・思想家の持つ大きな影響力の分析、一次資料の文脈に即した精神医学的な症状概念の発生と変遷の追跡、ある概念が精神医学に対して持った意味、「精神症状」という概念そのものの機能などであり、このセッションだけでも、精神医学史研究の面白さが遺憾なく発揮されていた。

つぎのセッション以降も、中国や韓国の伝統医学における精神医学や、日本の精神医学史、精神医療の方法論や病院史などに関する興味深い発表が続き、それに加えて会場では、口演と同時にポスター発表もあり、こちらも東洋と西洋双方から、ポスターの特性を生かした演題が出されていた。

個人的に、二日間の日程を通じて本当に楽しむことができた、というのが実感である。これだけマテリアルが盛りだくさんであるにもかかわらず心地よい緊張感が持続したのは、人間精神とその障害の多様性を反映した多種多様なテーマがつぎつぎと呈示されたためであり、そうした多様性が、学際的な視点から「過去に何が起こったのか」を知るという喜びをもたらしてくれたからだと思う。このようなシンポジウムが再び日本で開かれることを願うばかりである。

最後に、世紀の変わり目にあたってこうした意義深いシンポジウムを実現していただいた濱中先生と、名古屋市立大学精神科のスタッフの方々に深く感謝したい。

（岩手医科大学神経精神科　酒井　明夫）

例会記録

一月例会　平成十一年一月三十日(土)　順天堂大学医学部九号館八番教室

一、横浜と疱瘡　中西　淳朗

一、金子準二―断種史上の人びと（その二）　岡田　靖雄

二月例会　平成十一年二月二十七日(土)　順天堂大学医学部二号館第一会議室

一、実体験に基づく心臓ならびに脳神経活動の光学的計測機器開発史の研究　神野耕太郎

一、幕末の久留米藩医玉井忠田と著書傷寒論柯則について　秋葉　哲生・中西　淳朗

三月例会　休会

四月例会　平成十一年四月二十四日(土)　順天堂大学医学部九号館八番教室